

ヴィトゲンシュタインと哲学入門

京都大学文学部第7講義室

2015年4月17日(日)16:30~18:00

1 哲学的な問い

生きていると、様々な疑問に会う。なかでも哲学は人間にとって、とくに根本的な疑問に答えようと長いあいだ格闘してきた。例えば、

1. 絶対的な真理はあるか？
2. 世界は何でできているか？
3. 人の間になぜ普遍的なものがあるのか？
4. 超越論的なものはあるか？

20世紀初頭の哲学者、ヴィトゲンシュタインは、次のような問いに答えようとした。

「人は何を知り得て、何を知り得ないのか。」

彼は、人間は言語によって思考をする、ならば言語の限界が思考の限界だ、と考えた。言語についての厳密な考察という20世紀の哲学の大きな流れを作ったのは彼だと言っても過言ではない。

2 論理哲学論考

ヴィトゲンシュタインの生前に出版された唯一の哲学書、『論理哲学論考』は彼の「人は何を知り得て、何を知り得ないのか。」という超越論的な問いに対して答えるために書かれた彼の前期思想の形而上学である。

この書の目的は、人が知りうることの限界の確定、

この書の意義は、言葉を正しく使い、思考しうるものを知り、世界を正しく見るための指南書だということ。

2.1 言語と世界は形式を共有している

赤いリンゴを例に、言語と世界の間を考察する。

‘リンゴ’という個体は‘赤い’という性質との関係の上にある。我々は世界では‘赤いリンゴ’に出会うのであって、赤そのもの、りんごそのものには出会わない。つまり性質なき個体、個体なき性質とは出会わず、世界には、それらが事実の組としてのみ現れる。ここで、命題、例えば‘このリンゴは赤い’は、その個体と性質の関係を表しているととれる。つまり言語は世界における事実の関係を反映している。これをヴィトゲンシュタインの言葉で言うと、「言語は世界における事実の形式を示している。」となる。

また、文章レベルで考えると、赤いリンゴを見て、「このリンゴは赤い」、「このリンゴは青い」、「これはリンゴである」、「これはトマトである」などいろいろな命題を主張できるが、真なる命題と偽なる命題に分けられる。



言語は世界における事実の形式を示していると考え、真なる命題「このリンゴは赤い。」が目の前の「このリンゴは赤い」という事実と対応しており、偽なる命題「これはトマトである。」は目の前の事実と対応していないとわかる。真なる命題が事実と対応している。

逆に我々の認識する世界は何でできているか？世界は「リンゴ」そのものや「机」そのものから出来ているわけではない。世界はものが構成しているわけではない。むしろ我々は「茶色い机の上においてある赤いリンゴ」のような、事実の組としてものや性質に出会う。これを考えると、論理哲学論考の第一文、「世界は事実の総体である」(論理哲学論考 命題 1) が納得できる。

2.2 言語に働く論理、命題の意味

論理そのものは超越論的である。また、論理的真理(トートロジー)には意味がない。例えば、次の推論規則

$2+2=4$ ならば、雪は黒い。 $2+2=4$ である。よって、雪は黒い。

は、意味はおかしいが、論理的には正しいと直感的には正しいと思われる。このように、論理的真理には意味がないが、論理そのものは経験如何によらず正しいとわかる。すなわち論理は超越論的である。

命題の意味について考える。命題には、意味のわかる命題と、意味のわからない命題がある。後者をウィトゲンシュタインは「ナンセンスな命題」と呼ぶ。意味のわかる命題は、真か偽かがある命題、常真な命題、常に偽な命題がある。一つ目を彼は有意義な命題(e.g. このリンゴは赤い。) 2, 3つ目を無意味な命題(e.g. 外は雨が降っているまたは雨が降っていない。etc)と呼ぶ。ナンセンスな命題とは、たとえば「これは快適な刺身である。」のように、意味のわからないもの。意味がわからないのは、言葉の使い方を誤っているからである。

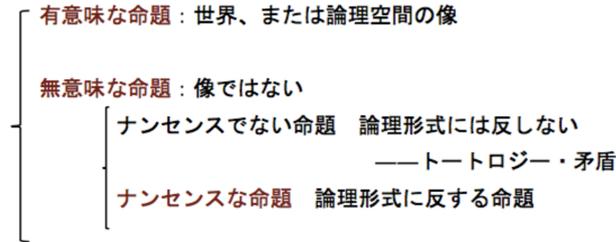
ナンセンスな命題や論理的真理以外の命題は、現実の世界と対応しているか、事実の像かそうでないかによって真偽を判定することが可能。

意味はわかるが世界の像でない命題もナンセンスな命題と彼は考える。

それは例えばアリストテレスの言ったような次の文もナンセンスである。

真、善、美は一致する

命題についてまとめると、



という分類ができる。そして、正しく世界を知るためには、意味のある命題を考えるべきである。

2.3 世界、言語の限界と限界の外について

論考で伝えなかったこと

正しく世界を見るには、正しく言語を使わなければならない。有意な命題を思考すること。倫理や価値は世界の外にある。

本当に価値のあることは世界の外、言語や論理を超えた領域にある。それは我々には考えしえない。

これが彼が『論理哲学論考』において伝えなかったことである。最後にウィトゲンシュタインの言葉で見てみる。

答えを言い表しえないならば、問いを言い表すこともできない。謎は存在しない。問いが立てられるのであれば、答えもまた与えられる。(6.5)

たとえ可能な科学の問いがすべて答えられたとしても、生の問題は依然としてまったく手付かずのまま残されるだろう。これが我々の直感である。もちろん、そのときはもはや問われるべき何も残されてはいない。そしてまさにそれが答えなのである。(6.52)

生の問題の解決を、人は問題の消滅によって気づく。(疑いぬき、そしてようやく生の意味が明らかになった人が、それでもなお生の意味を語るができない。その理由はまさにここにあるのではないか。)(6.521)

だがもちろん言い表しえぬものは存在する。それは示される。それは神秘である。(6.522)

語りうるもの以外は何も語らぬこと。自然科学の命題以外は それゆえ哲学と関係のないこと以外は何も語らぬこと。そして誰か形而上学的なことを語ろうとする人がいれば、そのたびに、あなたはその命題のこれこれの記号にいかなる意味も与えていないと指摘する。これが本来の哲学の正しい方法にはかならない。この方法はその人を満足させないだろう。彼は哲学を教えられている気がしないだろう。しかし、これこそが唯一厳格に正しい方法なのである。(6.53)

私を理解する人は、私の命題を通り抜け、その上に立ち それを乗り越え、最後にそれがナンセンスであると気づく。そのようにして私の諸命題は解明を行なう。(いわば、梯子を上り切ったものは梯子を投げ捨てねばならない。) 私の諸命題を葬りさること。そのとき世界を正しく見るだろう。(6.54)

語りえぬものに対しては、沈黙しなければならない。